

日本学術会議 公開シンポジウム
子育て支援の継続性を高めるために—新たな視点の提案—

子どもの育ちに還元される子育て支援

—ケアの倫理の視点で語られていることを子どもの育ちに還元される子育て支援
の視点から捉え直す—

和洋女子大学人文学部

田代和美

1 ケアの倫理の出発点： 他者への依存から私が生まれる

岡野八代（2012）『フェミニズムの政治学 ケアの倫理をグローバル社会へ』
（みすず書房）より

- わたしが、<わたし>であるという意識を持つようになるのは、本当にあったのかどうかさえ定かではない、他者から受けたケア、つまり注視、気遣い、苦勞、葛藤、そして愛情があったからこそ、なのだ。そのような他者がいたからこそ、<わたし>が生まれる（アドリエヌ・リッチ（1976）『女から生まれる』）
- ケアする者に重くのしかかる負担とそれに対する苛立ちと、ケアされる側への注視と愛情とが、矛盾するどころか、1つの同じ感情である（同上）
- ケアという営みの特徴

非対称的な関係・他者の個別具体的なニーズへの注視・他者に対する献身

↓

* これらを前提として、子どもの育ちに還元される子育て支援を考えたい

2 ケア倫理から社会的責任論へ： 育児の社会化（1）脆弱性モデル

- 脆弱さ(Vulnerability)と責任の関係から共生論を提示するロバート・グディン（1986）の議論を参照
- 自発性モデル(Voluntaristic Model) = 親になったから特別な責任を負うべき（因果論的責任モデル） → 脆弱性モデル（Vulnerability Model） = 関係性の中で脆弱な立場に置かれる子どもの危害を避けるために誰かが「特別な責任」を負うべき（帰結主義的責任モデル）へ
- 脆弱性モデル：責任は多数の者と分有可能・特別な責任者（親）に多くの裁量がある・特別な責任者（親）が常にプラグマティックな義務（子育て）を担うのではなく、義務（子育て）は分有できる → 子どもを核とした育児の社会化のシステム
- 虐待への対応は脆弱性モデル
- プラグマティックな義務（子育て）を分有する保育者は脆弱性モデルに立つ（子どものより良い育ちのために子育てを親と分有している）が、親の責任と子育てを担うこととの間での葛藤も生じている



* 親は、初めから特別な責任を負うことができるのか？

2 ケア倫理から社会的責任論へ：育児の社会化

(2) 脆弱性モデルに立つ子育て支援

- 特別な責任が立ち現れるまでの時間：常に責任は関係性の中で生じる。文脈に応じた実践を積み重ねる中で、当事者は互いに呼びかけと応答の仕方を学び合いながら、取替の利かない「特別な責任」が関係性の中で立ち現れてくる（グディン）＝子育て（プラグマティックな義務）を通して、特別な責任が立ち現れる・子育ての初めから特別な責任を担うことは難しい



- 守ってもらえる、自分が大切にされていると感じられて、自分と他者への信頼を得て子どもが育っていく子育ての実践とそれを通して親に特別な責任（感）が生まれてくることを支援する必要がある
- 脆弱性モデルは子育てよりも介護のモデル：①介護行為の分有が介護者（特別な責任者）の責任の放棄を意味しない ②ケアマネージャーが居宅を訪問し、介護を必要とする脆弱な立場の人の人格を尊重しつつ、介護者の生活状況も踏まえて介護行為の分有の提案と手続きを行う



* 生活の中で子育て（プラグマティックな義務）を担う親への支援→3へ

* 親が特別な責任を担う人になっていくための支援→4へ

3 親への支援：現在を支援する（エヴァ・フェダー・キティ（1999） 『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』（白澤社）より）（1）

- 依存労働（子育て）の特徴

- ①子育ては、多くの重要な面で親なしには自分ではどうすることもできない子どもに対する責任を伴うため、他のたいていの仕事の限度を超えた道徳的な義務が生じる。
- ②子育てはニーズに対応し、しばしばニーズを予想することを必要とするので、子育てをうまく行うには、事実上、子どもへのかなりの愛着が必要である。思いやってくれる親が必要。加えて、子育ての仕事の中身は「機能上明確に限定されている」というよりは「機能上拡散している」ので、親は一連の固定的な仕事をこなすのではなく、子どもの全体としての安寧を図るよう、取り組まねばならず、子どものニーズを満たすために必要なことは何でもしなければならない。親自身のニーズを充たすことが、子どものニーズを充たすために不可欠である場合を除いて、たいてい親自身のニーズより子どもへの責任が優先される。
- ③子育ての要求は、市場での雇用労働の要求との間でしばしば葛藤を生む。



- 親にも脆弱性が生じる。グディンの脆弱性モデルを親にも拡張する必要性を説く

3 親への支援：現在を支援する（エヴァ・フェダー・キティ（1999） 『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』（白澤社）より）（2）

- ドウーラ (doula) = 出産し新たに母親になって子どもを育てる人をサポートする人

→ドウーリア(doulia) = 子育てをする親を公的にサポートする構想を提唱

目的①親を公正に扱うため②子どもを育てるため③基本的な人間の愛着を生み育む依存関係を尊重するため



親への支援として必要なこと

- 継続的な支援者がいること
- 公的な支援につながりやすくすること
- 支援者が子育て行為の特徴（自分が後回しになること、互酬関係が生じにくいこと、雇用労働と違って仕事が明確でないから休めないこと等）を理解した上で必要な支援につなげること
- 負担感は、子どもへの注視と愛情がある子育てを行っているからこそであり、子どもにとって大切なことを行っている姿を認めてフィードバックすること（指導ではない）



- 養育行為を通して親に「特別な責任（感）」が生まれていく

4 親が特別な責任を担う人になっていくための支援 (Sara Ruddick (1989) 『Maternal Thinking – Toward A Politics of Peace』からの岡野の引用より)

- 子育ての中で身につけ、鍛えられていく実践と思考方法 (愛情があるからこそ生じる戸惑いと葛藤の中で、鍛えられていく母的な思考)
 - ①子どもは自分とは別人格であることを尊重する実践と思考方法
 - ②子どもに応答する中で自問と試行錯誤を繰り返しながら、何をしなければならないかを考えて、歓迎を込めた応答をしようと努める実践と思考方法
- しかし、愛情は支配や抑圧に容易に転化し、暴力をも引き起こすことをみても、愛情関係の中で鍛えられていく思考方法は自然に身につくようなものではない
 - ↓
 - 親が特別な責任を担っていく人になっていくための支援として必要なこと
 - 子育ての中で非暴力的な共存関係を築けている姿を認めて、フィードバックすること
 - その子にとって自分が何をしたらよいのかを試行錯誤しながら考えて応答できるように支援すること
 - ↓
 - 子どもの育ちに還元される子育て支援：次世代の子どもたちの最善の利益を考えながら子育てができるように親を支援すること